

論文の和文要旨

論文題目

TRADUZIONE: PRATICA E CONFRONTO.
Il discorso narrativo in Higuchi Ichiyō attraverso le traduzioni.

翻訳：実践と比較

翻訳からみる樋口一葉の語り

氏名

FIORETTI ANDREA

フィオレッティ・アンドレア

本論文は、樋口一葉の四つの代表的な小説を、現代語訳と欧米訳を通して分析したものである。一葉文学にみる「語り」に焦点を当て、起点テキスト (source text) を目標テキスト (target text) と比較しながら、小説のなかで語り手がどう位置づけられるか、どのような役割を果たしているのかについて考察した。

一葉のテキストを翻訳と語りの観点から分析した本研究の独自性は、二つの要素から成り立つ。それらは、東京外国語大学とローマ・ラ・サピエンツァ大学という異なる学問的背景を持つ研究機関間のコチューテールで行われた指導の成果を基にして創案したものである。

独自性の第一の要素は、翻訳比較分析という翻訳研究の比較的新しいアプローチを日本文学の一つのケースに当てはめたことである。このアプローチを通して、特定のテキストが様々な文化にどのように受容されたかを観察できる。分析の前提は、翻訳は、原文に対して「忠実」であるかどうかという基準だけではなく、起点テキストの解釈を広げることに役に立つ要素をもたらす、普遍的な有効性をもつ文学テキストとして評価すべきであるということである。このような分析をするうえで、樋口一葉の場合は特に興味深い。なぜなら、百年以上前に出版された英訳を含め、20世紀の異なる時期の様々な各国語訳もあれば、日本でも一葉の小説が訳されており、数多くの現代語訳が存在している。この点で、樋口一葉は日本近代文学のなかで特異なケースとしてみなすことができる。

第二の要素は、本研究が有する物語論的なパースペクティブである。日本文

学における「語り」の問題は、日本の批評家たちにとって大きな関心事であった。ジュネットやチャットマンによるナラトロジーの概念に基づいている、最近の笹川容子の研究が示しているように、樋口一葉の場合も例外ではない。一方、欧米の日本文学批評では、日本の小説における「ナラトロジー」に対して同じような関心がみられず、日本の小説の語りの方が欧米諸言語にいかにか訳されているかという問題に関しても、比較的分析が欠けている。この観点からも、一葉の文学は意義のある分析素材であるといえる。既に言及したように、近代文学に位置づけられる一葉の小説の語りの構造には前近代文学の影響が強く残っており、翻訳の過程では、この特徴が、各文化の読者が理解しやすいよう自由に解釈されることが多く、目標テキストに様々な解釈やエクリチュールが生み出される要因となっている。

本論文の五つの章では、『大つごもり』『たけくらべ』『にごりえ』『十三夜』の一葉の代表的な小説を取りあげた。『たけくらべ』『にごりえ』は、私が最近出版したイタリア語訳(*Higuchi Ichiyō, Due racconti, Vecchiarelli 2013*)を、他の英訳、仏訳、独訳と比較し、『大つごもり』『十三夜』は、物語学分析で扱う幾つかの箇所をイタリア語に翻訳し、論文の付録部分に対訳の形で収めた。

第一章では、一葉のいわゆる「奇跡の十四ヶ月」を開いた『大つごもり』を扱い、1903年にさかのぼる英訳とその作者「藤生ていこ」の人物像を紹介した。藤生は明治時代に女中の労働条件改善運動に貢献した人物であるが、探し当てた資料を基に、文学者や翻訳者としての活動を中心に彼女の伝記を構成した。藤生による『大つごもり』の英訳は、様々な側面から検証すると、原文に忠実であるとは言えないが、それよりも、この翻訳が出版されるわずか七年前に早世した樋口一葉の文学の受容方法を把握できる点で興味深い。後年に出た様々な翻訳との対比を通して、そのことがより鮮明に浮かび上がり、その後一葉の文学的な感覚が日本国外でどう捉えられたのかを示すことができる。論文の他の分析と同じく、対象となるくんだりでは、特に語り手が物語の中にどう位置づけられるか、語り手と登場人物のそれぞれの声が相互にどう影響を及ぼし合っているかについて考察する。周知のように、一葉は小説のなかで登場人物の科白をカギ括弧(「」)などで括っておらず、そのため、翻訳作業では、登場人物の科白を的確に分類し、整理することが非常に困難である。本研究では、主人公お峰の内的独白(*interior monologue*)を素材に、ほとんどの各国語訳にみられる自由間接話法(*free indirect speech*)の例に着目しながら、原文と相当する翻訳

箇所と比較分析をした。

『たけくらべ』の主人公、美登利の内的独白の例も丹念に分析した。幾つかの箇所で、原文にも欧米文学の自由間接話法に似たような機能を果たしている語りの方が存在するのではないか、前近代的な特徴を持つと一般的にみなされている一葉の文体には、近代的な要素もあるのではないかという仮説の立証を試みた。実際、『たけくらべ』の外国語訳にも自由間接話法が広く使われているが、それぞれの翻訳で話法の扱い方が明らかに異なっており、一葉が意図したと思われる語りの方から根本的に離れてしまうことも多い。こうした『たけくらべ』のナラトロジーの問題は第三章で扱った。

第二章では、『たけくらべ』の時制の問題を論じた。一葉小説の大部分の外国語訳では過去形が用いられている。この選択は、いわゆる『「語り」時制』（イタリア語では「遠過去」や「半過去」などの時制）が典型的な語りの効果をもたらすのに最適だという前提に基づいているに違いない。しかし、本章の中で示すように、一葉の原文では物語の時間が「過去」に位置づけられていることに十分な証拠を見出すことはできない。むしろ、出来事その最中にまるで生中継のような感覚で語られているように思われる。こうした効果を過去形で再現することが妥当だとは考えられないにもかかわらず、実際に本研究で検討したほとんどの翻訳はこの選択を採っている。

一方で、重要な例外としては、イタリアに日本の文化を紹介し、普及することに多大な貢献をもたらした下位春吉が 1920 年に出版した *Palude mortifera* という『にごりえ』の最初のイタリア語訳が挙げられる。本論文の第四章で取り上げるこの翻訳は、現在形が主要時制として使われている唯一の例である。この選択は、イタリア文化・文学に深く馴染んだ下位による意識的な選択であり、いわゆる「語りの現在形」が当時の文学表現の一般的な手段ではなかったことを考えると、非常に興味深い。

一葉の小説で登場人物の直接話法や内的焦点化がもっとも利用されている『にごりえ』では、この書き方によって、小説の劇的効果が著しく高められている。『にごりえ』の主題は、主人公お力の内的葛藤であるが、お力と源七が運命づけられた心中は謎にまつまれている。短い結びのなかで間接的に不明瞭な形でしか打ち明けられていない。このような「反物語」的ともいえる特徴も、一葉の近代的な感覚をほのめかすもので、本章では各翻訳者がそれを目立たせるためにどのような戦略を立てたかを示した。

最終章である第五章では、『十三夜』とその外国語訳を分析対象とした。『十三夜』には、もう一つの「古い」翻訳、つまり津田梅子が1904年に“The Student”という雑誌に連載した英訳がある。上述の藤生ていことは異なり、津田梅子は著名な人物であり、6歳の時に岩倉使節団に最年少として参加したことで知られる。日本人女性の教育改善に命を捧げた津田梅子が完成したこの翻訳も、津田自身が積極的に参画した雑誌、“The Student”によって促進された英語教育の普及という方針に密接に関連している。満谷マーガレットによる先行研究でロバート・L・ダンリーの英訳と比較されているこの津田梅子の翻訳の他には、たとえば須賀敦子の実現した『十三夜』のイタリア語訳が存在し、篠原一の日本語現代語訳は特に登場人物と語り手の話法の整理の観点から興味深い。こうした様々な翻訳の比較から、一葉の文体に潜在している近代的な特徴が浮き彫りになり、欧米言語がどの程度でそのニューアンスを再現できるかが明らかになった。

論文のタイトルでもほのめかしているように、本研究は翻訳の「実践」と「比較」という方法に従っている。外国語訳と日本語現代語訳の比較分析とともに、これまでのものとは違う翻訳方法による、イタリア語の新訳も試みられている。たとえば、言及した時制の扱いだけでなく、原文のリズム、語順や段落の長さと言語の特徴を重視した訳し方を実践した。特に原文の語りの方については、近代文学の通常の方法とは違い、地の文と語り手の声と登場人物の科白を、引用符などで分けずに、文語と口語のニューアンスだけを生かして進めることにした。論文の付録部分に収めたイタリア語訳は、私がこれまで取り組んできた比較文学研究と翻訳実践の相互作用の成果であり、一葉のテキストがもつ文体的な特徴を欧米語でも極力保とうとしたという点で史上初の試みである。